

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩 アジアの大地」

70歳を目前に、中国・桂林を訪れた小川原脩。そこで出会った風物に目を見張り、創作の新境地をひらきます。中国、チベット、インドの情景、そしてここ倶知安の風景まで、小川原脩が描いたアジアを紹介します。

会期：12月19日（土）～平成28年4月17日（日）

■企画展示

「小川原脩のまなざし＜顔＞」

小川原脩が描いた、いろんな「顔」を見てみましょう！誰かによく似ていませんか…？

会期：12月19日（土）～平成28年2月14日（日）

関連イベント ワークショップ「びじゅつかんで福笑い！」

日時：平成28年1月9日（土）10時～15時

会場：美術館第2展示室・ロビー

参加費：観覧料（一般500円、小中学生200円）がかかります

申込み不要・直接会場へお越しください。時間内にいつでも参加できます。

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

エコール・ド・パリ物語⑤

「愛と夢と幻想の画家 マルク・シャガール」

日時：1月16日（土）14時～15時

ミュージアム・シネマ

「ミッドナイト・イン・パリ」ウディ・アレン（2011年／アメリカ）

日時：1月30日（土）14時～15時45分

いずれも講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

風土館講座 人々の生活を支えた鍛冶技術

11月28日（土）に倶知安風土館において、「むらの鍛冶屋 野鍛冶の世界」と題して、鹿熊勤さん（写真右）による講演会が開かれました。鹿熊さんは全国の鍛冶技術を取材しており、倶知安風土館における鍛冶道具の展示にもアドバイスしてくれている方です。

鋤や鋤などの農具や包丁など私たちの生活を支えてきた道具は、ほんの少し前までは鍛冶屋と呼ばれる人が作っていました。タイトルにある野鍛冶とは、農具を専門に作る鍛冶屋のことを言い、農具の大半が工場生産に移行した現代においても、野鍛冶の作る道具を愛用している人が多いといえます。参加者の中にも、鍛冶屋が作った道具を子ども時代によく使っていたという人もおり、鹿熊さんの話をどこか懐かしむ様子で聴いていました。



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

1月の休館日

1～5日、12日、19日、26日

美術館長から

六本木の国立新美術館で、つい最近まで開催していた「ニキ・ド・サンファル」展。ニキは、パリ生まれのアメリカ育ち、若い頃はモデルもしていた異色のアーティストです。ライフルで絵具を飛び散らす「射撃絵画」で注目を集め、カラフルな色彩と大らかな姿の女性像は、世界的に話題を呼びました。ニキの彫刻は、ユーモラスでユニークですが、そこには、社会や女性の在り方に対する真剣な問いかけがあります。倶知安に腰を据えて、世界の動きや人間の在り様をじっと見詰めていた小川原脩。同年に亡くなったこの二人が出会っていたら、熱い討論になったことは間違いありません。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】

木田金次郎美術館

「木田金次郎 連作の軌跡」繰り返し描いたモチーフ（対象）の作品を数多く取り上げます。会期：開催中～3月27日（日）

■西村計雄記念美術館 ☎ 0135-71-2525

■木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

■荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

■有島記念館 ☎ 0136-44-3245

感動一点 の場

『游』

1991 年 小川原 脩 画



「游（ゆう）」、あまり目にするものがない漢字であるが、その意味には「水上をおよぐ」「川の流れ」、そして「遊」と通じる「あそぶ、ぶらぶらする」という意味がある。

この絵の中では、何があそんでいるのだろう。温かみのあるピンク、オレンジ、イエローといった色が全体をふんわりと覆い、白い樹木が画面中央に縦に伸びている。その周りに小鳥たちが5羽、飛び回ったり休んだりしている。リズムカルに、自由に振る舞う小鳥たち、穏やかな時間が流れている。これは、優しい群れの姿である。

1979年に中国・桂林へ、81年からはチベット、それから86年のインド・ウッタラプラティシュへの旅まで、小川原脩は断続的にアジアを訪れ、それぞれの旅ごとに新鮮な感慨を得ては、また倶知安での創作の日々に戻る。アジアの大地をめぐる旅を経験したことで、心のおもむくまま自由に優しい空間を描く、新しい創作のとびらを拓いた。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

ふる探訪 さと

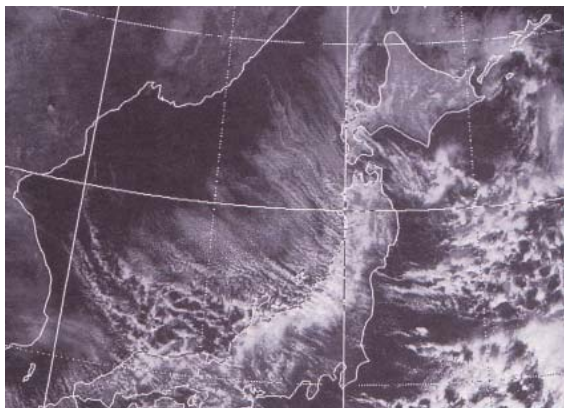
394 回

—多雪の歴史—

倶知安の冬のイメージと言えば、まず雪である。雪は人々の生活全般に深い影響を及ぼし、一方でスキー観光を成り立たせてもいる。これでもかと降り積もるけれど、地史的に見るとこれはごく最近始まったことだと考えられている。

日本列島で多雪地は北陸から北海道にかけての日本海沿岸に偏っている。そして共通しているのは、日本海に面した山地の内陸側ということだ。つまり多雪には、日本海と山とが深く関わっているのである。

天気予報を見ると分かるように、多くの低気圧や高気圧は西のユーラシア大陸で発生し、西風に乗ってのはるばる日本列島までやってくる。日本列島はその通り道に位置しており、西風は日本海を渡るときに温められて湿気を含む。と言うのは、そもそも空気には、温度が高いとより多くの水分を保つ性質があることと、日本海に南から流れ込む対馬暖流が膨大な熱を運び込んでいるためだ。そして、たっぷりと湿気を含んで日本列島に到着した風は、沿岸に山地があると上昇・冷却されて含んだ水分を放出する。冬であれば放出された水分は雪となり、吹き続ける風によって内陸側に運ばれてそこに降り積もる。



ところで、今から二万年ほど前の氷河時代には、海面低下で対馬海峡は陸化していた。暖流が南から流入することはない、日本海は淡水湖で、冬には凍ったという証拠もある。すると、大陸からの西風は寒くて乾燥したまま日本列島に届いていたはずで、当時の倶知安の冬は寒く乾燥していたと考えられるのである。

氷河期が終わり、温暖化にともなって海面が上昇して対馬海峡が開き、そこから暖流が流入することで日本海が今のようになった。だから多雪の始まりは、ここ一万年ほどの、日本列島の地史から見ればごく最近のことだと見なされている。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）